明治安田生活福祉研究所

２００７年８月 16 日

「30～50 歳代未婚者の生活設計に関する意識調査」結果概要

株式会社明治安田生活福祉研究所(社長 鶴 直明)は、全国の 30～50 歳代の未婚者を対象に、日常生活、結婚、住まい、貯蓄や保障、親との関係、老後生活などに関する実態や考え方に関するアンケート調査結果を分析しました。以下、その概要をご報告いたします。

＜主な内容＞

	＜ページ＞
Ⅰ．現在の暮らし・意識	
◆ **「結婚に前向き」は男性 40 歳代まで。女性は 30 歳代まで ―― 結婚意欲の節目は、男性 50 歳、女性 40 歳。**	6
◆ **親から受ける「日常の生活費」支援 ―― 親同居の非正規就労の男性は、40 歳代１／４、50 歳代１／３。女性はさらに高く、40 歳代４割弱、50 歳代５割弱。**	7
◆ **貯蓄目的のトップ、30 歳代後半以上は「老後資金」。男性は 50 歳代前半で７割。女性は 40 歳代前半で７割超、40 歳代後半では９割近くにも。**	10
Ⅱ．将来の生活設計	
◆ **30・40 歳代の老後不安トップは「生活資金」。30 歳代女性では６人中５人も。50 歳代になると、「自分の健康」が「生活資金」を上回り最多に。**	14
◆ **自分が要介助になったら？ 「有料老人ホームに入居」は、男女とも正規就労者が高割合。所得・貯蓄の多寡と関係。**	16
◆ **老後、誰と暮らすか？ 男女とも「１人で」が最多。相手を求める人は、男性は「異性のパートナー」に未練、女性は身内の「兄弟姉妹」。**	20
◆ **老後の楽しみ、トップは「旅行・ドライブ」。男女とも正規就労者のほうが高割合。２位以下は、女性「芸術鑑賞」「食べ歩き」、男性「パソコン」「テレビ」。**	23

※本資料は、日本銀行金融記者クラブ、文部科学記者会、厚生労働記者会に配布しております。

ご照会先	㈱明治安田生活福祉研究所 生活設計研究部 柴田、奥野、森	電 話：03(3283)9297 FAX：03(3201)7837 Eﾒｰﾙ：rbj@myilw.co.jp

＜調査の概要＞

（１）調査期間：2007 年３月 22 日～24 日

（２）調査媒体：インターネット調査

（３）調査分析対象：アンケート調査を行った全国の 30 歳～59 歳の単身男女のうちの、結婚未経験者（総回答数 1,763 人のうち 1,316 人）。

（４）留意点

本報告書では、性別、年齢層、就労形態（正規就労・非正規就労）ごとの特徴を把握することを目的に、これらの属性ごとに所定のサンプル数を確保することを優先した。そのため、サンプルの構成比は、わが国の実際のそれとは異なっている。

（５）属性別サンプル数　（人）

		30～34歳	35～39歳	40～44歳	45～49歳	50～54歳	55～59歳	計
男性	正規就労	72	66	70	44	66	29	347
	非正規就労	88	55	95	38	52	32	360
女性	正規就労	73	55	67	32	51	25	303
	非正規就労	77	55	80	23	53	18	306
計		310	231	312	137	222	104	1,316

（６）分析対象サンプルの主な属性分布状況

①親との同居・非同居　（%）

		同居している	同居していない	計
男性	正規就労	57.6	42.4	100.0
	非正規就労	66.7	33.3	100.0
女性	正規就労	60.1	39.9	100.0
	非正規就労	67.3	32.7	100.0

②年収　　（%）

			300 万円未満	300 万円～500 万円未満	500 万円～750 万円未満	750 万円以上	合計
男性	正規就労	30 歳代	23.2	46.4	23.2	7.2	100.0
		40 歳代	23.7	33.3	33.3	9.6	100.0
		50 歳代	29.5	26.3	21.1	23.2	100.0
	非正規就労	30 歳代	79.0	18.9	1.4	0.7	100.0
		40 歳代	67.7	23.3	6.0	3.0	100.0
		50 歳代	81.0	19.0	0.0	0.0	100.0
女性	正規就労	30 歳代	38.3	47.7	9.4	4.7	100.0
		40 歳代	33.3	35.4	21.2	10.1	100.0
		50 歳代	30.3	39.5	23.7	6.6	100.0
	非正規就労	30 歳代	84.8	11.4	3.0	0.8	100.0
		40 歳代	82.5	17.5	0.0	0.0	100.0
		50 歳代	78.9	18.3	1.4	1.4	100.0

③貯蓄残高　　（%）

			300 万円未満	300～500 万円未満	500～1000 万円未満	1000～2000 万円未満	2000 万円以上	合計
男性	正規就労	30 歳代	61.6	13.0	11.6	9.4	4.3	100.0
		40 歳代	50.9	12.3	11.4	10.5	14.9	100.0
		50 歳代	47.4	11.6	13.7	12.6	14.7	100.0
	非正規就労	30 歳代	90.9	4.2	2.8	1.4	0.7	100.0
		40 歳代	75.9	6.8	7.5	5.3	4.5	100.0
		50 歳代	61.9	9.5	15.5	8.3	4.8	100.0
女性	正規就労	30 歳代	60.2	9.4	15.6	10.9	3.9	100.0
		40 歳代	48.5	14.1	20.2	12.1	5.1	100.0
		50 歳代	26.3	10.5	31.6	18.4	13.2	100.0
	非正規就労	30 歳代	81.8	4.5	9.1	3.8	0.8	100.0
		40 歳代	66.0	14.6	12.6	4.9	1.9	100.0
		50 歳代	54.9	11.3	19.7	11.3	2.8	100.0

目　次

【現在の暮らし・意識】

１．「生活満足度」は女高男低 ･･･ p. 5

２．結婚意欲の節目は、男性 50 歳、女性 40 歳 ･････････････････････････ p. 6

３．親のサイフが生活費の一部 ―― 親と同居の非正規就労者 ･････････ p. 7

４．女性のほうがコツコツ貯蓄 ･････････････････････････････････････ p. 8

５．心配なのは老後資金 ―― 貯蓄目的のトップ ･････････････････････ p.10

６．非正規就労者も２割近くが持ち家あり ―― その半数以上は相続 ･･ p.11

７．住宅購入の男性は４人に１人が結婚を想定 ･････････････････････････ p.13

【将来の生活設計】

８．「生活資金」「健康」「要介助」 ―― 老後の３大不安 ･････････････ p.14

９．親が介助状態になったとき ―― 50 歳代から現れる男女の違い･･････ p.15

10. 自分が要介助になったら？ ―― 「有料老人ホーム入居」は資金次第 p.16

11. 親と同居者の過半は、「今の親の家が将来の自分の家」 ･････････ p.18

12. 30 歳代でも「生涯家の購入予定なし」が多数。年齢が高いとさらに増加 p.19

13. 男性に顕著な老後の「１人暮らし覚悟」 ･････････････････････････ p.20

14. 老後の相談相手は、 男女ともに１に「友だち」、２に「親族」 ･････ p.21

15. 老後、住みたい場所 ―― 女性は都会志向 ･････････････････････････ p.22

16. 楽しみのトップは老後も「旅行・ドライブ」 ･････････････････････ p.23

１．現在の生活満足度

○ 「生活満足度」は女高男低 ―― 正規就労の 30 歳代女性の３人中２人が「今の生活に満足」
○ 非正規就労の男性、半数が「今の生活に不満」

（１） 女性のほうが男性より高い生活満足度

現在の生活にどの程度満足しているかを尋ねた。図表のように男性よりも女性の満足度のほうが高い。正規就労の 30 歳代男女をくらべると、〝満足派〟（「満足」＋「まあ満足」）の割合は男性 45.6%に対し、女性 64.9%で女性のほうが 20 ポイント近く高い結果であった。

正規就労の 40 歳代では男女差が 0.3 ポイントと僅差であるが、全般的に女性のほうが生活の満足度は高い。

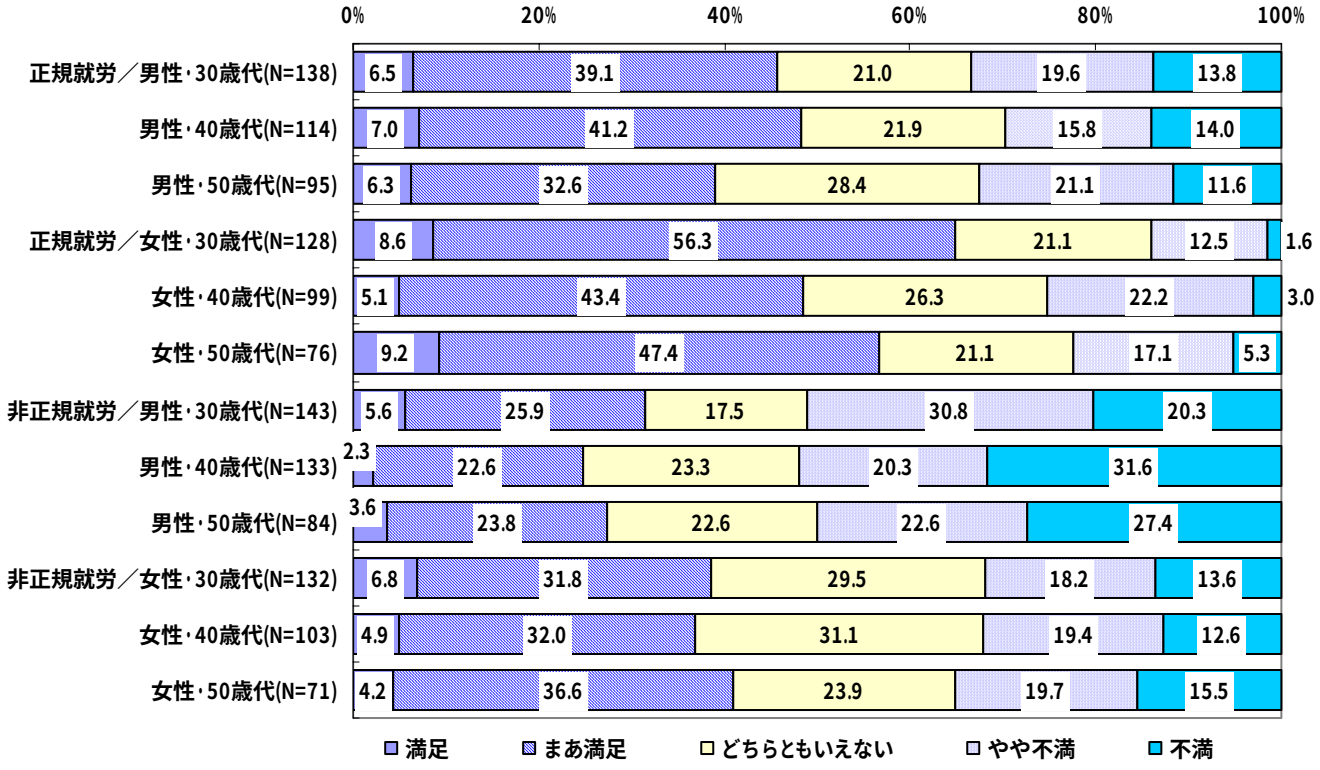
（２）正規就労者のほうが非正規就労者よりも高い生活満足度

就労形態別に見ると、正規就労者のほうが満足度は高い。例えば 30 歳代男性では〝満足派〟の割合は正規就労者 45.6%に対し、非正規就労者 31.5%で正規就労者のほうが 14 ポイントほど高い。各年齢層共通して正規就労者の満足度は非正規就労者よりも高い。

また、非正規就労の男性を見ると、〝不満派〟（「不満」＋「やや不満」）が２人に１人と高割合。さらに、はっきり「不満」と回答した人が２～３割を占めていることが注目される。

３ページの年収分布に見られたように、非正規就労者では年収 300 万円未満層が７～８割を占め、正規就労者との所得格差がある。所得が生活満足度に大きく関係していると考えられる。

図表１　現在の生活の満足度



２．結婚意向

○ 結婚意欲の節目は、男性 50 歳、女性 40 歳
○ 40 歳代男性の７割がまだまだ結婚に前向き

（対象は正規就労者）

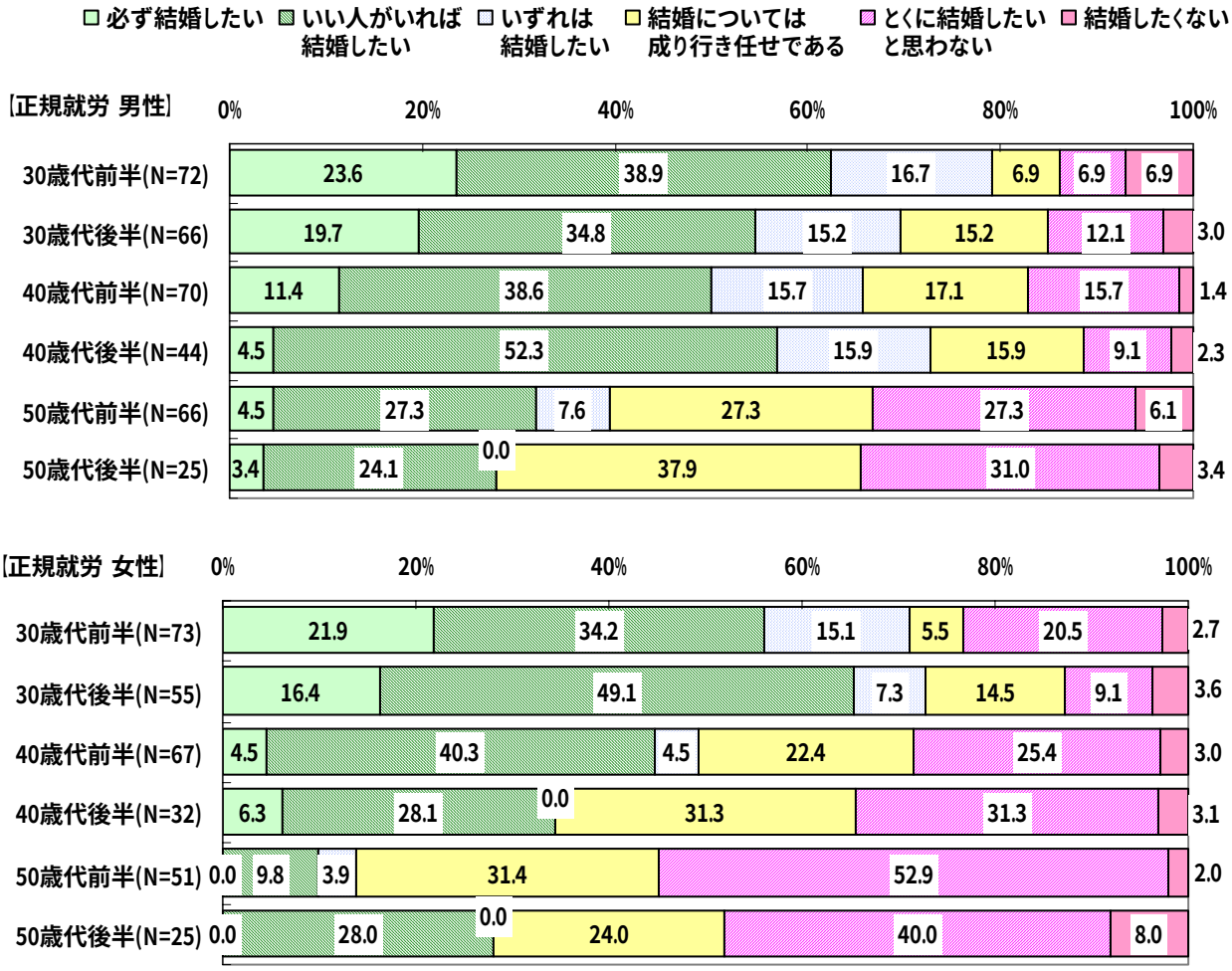
（１）男性の結婚意欲の節目は 50 歳

〝結婚前向き派〟（「必ず結婚したい」「いい人がいれば結婚したい」および「いずれは結婚したい」の合計）の割合を見ると、男性は 40 歳代後半まで７割前後を維持しているが、50 歳代になると大幅に低下する。このことから、30～40 歳代は結婚を意識する年代と見ることができ、50 歳に大きな節目があるように思われる。

（２）女性の結婚意欲の節目は 40 歳

女性の〝結婚前向き派〟の割合は、30 歳代は７割強だが、40 歳代前半には５割、同後半は３割強と急減している。女性の場合、結婚を意識する年代の境が男性よりも 10 歳程度若く、40 歳に意識面での節目が見られるようである。

図表 2 結婚に対する考え方



３．親からの経済的支援

○ 親のサイフが生活費の一部 …… 親と同居の非正規就労者
○ 女性のほうが高い親への依存度

（１）親と同居の非正規就労者の多くに親からの経済的支援

親から経済的な支援を受けている人の割合には、就労形態および親と同居しているか否かにより顕著な差が見られる。非正規就労者で親と同居している人は、恒常的に親から支援を受けている人が多いことが明らかになった。

親と同居している場合、非正規就労の 40 歳代男性の４人に１人が「日常の生活費」の支援を受けていると回答している。これに対し、正規就労者では 13%ほどに留まっている。

一方、親と同居していない場合、「日常の生活費」の支援を受けている人は、非正規で 5.0%、正規で 6.1%と差はほとんどなく、その割合も低い。

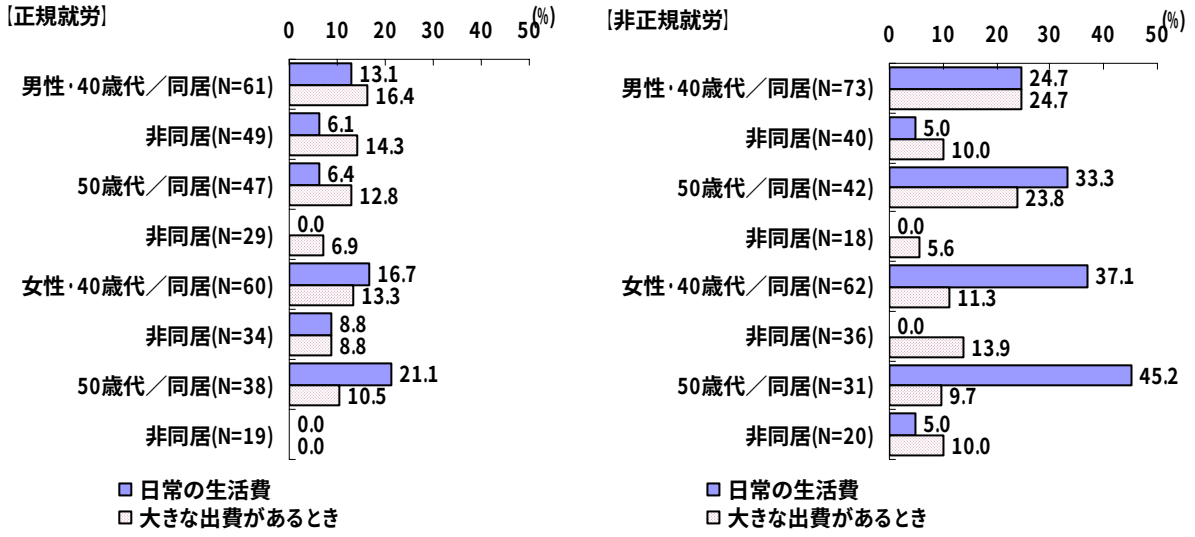
非正規就労で親と同居している人では、男女ともに 40 歳代よりも 50 歳代のほうが「日常の生活費」の支援を受ける割合が高いことも注目される。

このように非正規就労で親と同居している場合、かなりの世帯で親から子への所得移転が日常的に行われている。

（２）女性のほうが高い親からの経済的支援割合

男女別に見ると、女性のほうが「日常の生活費」の支援を受ける割合は高い。非正規就労で親と同居している女性の場合、40 歳代では３人に１人、50 歳代では２人に１人が日常的支援を受けている。正規就労の女性は 40 歳代で 16.7%、50 歳代で 21.1%と非正規就労者に比べてその割合は低いものの、男性よりも支援を受けている人は多い。男女の所得の差が要因と推測される。

図表 3　親からの経済的支援（複数回答）



４．貯蓄の頻度

○ **女性のほうがコツコツ貯蓄――30 歳代の〝毎月貯蓄派〟は女性６割、男性４割強**

○ **転職経験者は低い貯蓄率――収入減で余裕がない？**

（対象は正規就労者）

（１）女性で高い貯蓄頻度（図表 4-1）

〝毎月貯蓄している〟（「毎月およびボーナスのときにしている」＋「毎月しているがボーナスのときはしていない」）人は、30 歳代の男性では 43.5%だが、30 歳代の女性では 60.1%で、女性のほうが 16.6 ポイント高い。

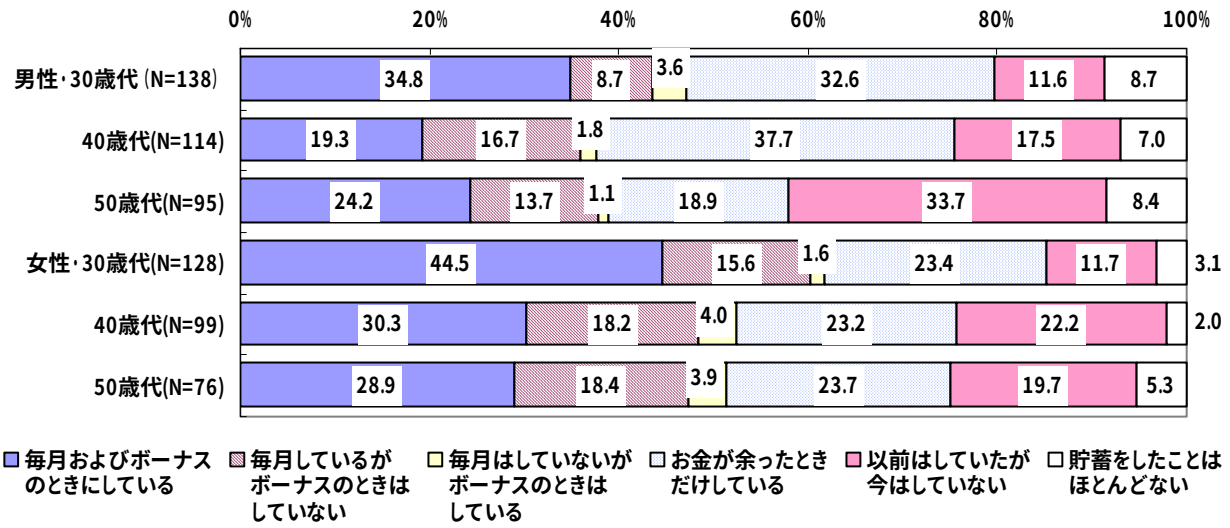
40 歳代、50 歳代でも女性のほうがそれぞれ 12.5 ポイント、9.4 ポイント高い。

（２）40・50 歳代で低い貯蓄頻度

男女ともに、40・50 歳代の貯蓄頻度のほうが 30 歳代よりも低い。

「毎月およびボーナスのときにしている」人は、30 歳代男性では 34.8%であるのに対し、40 歳代では 19.3%、50 歳代では 24.2%で、30 歳代よりもそれぞれ 15.5 ポイント、10.6 ポイント低い。

図表 4-1　性別、年齢別の貯蓄頻度



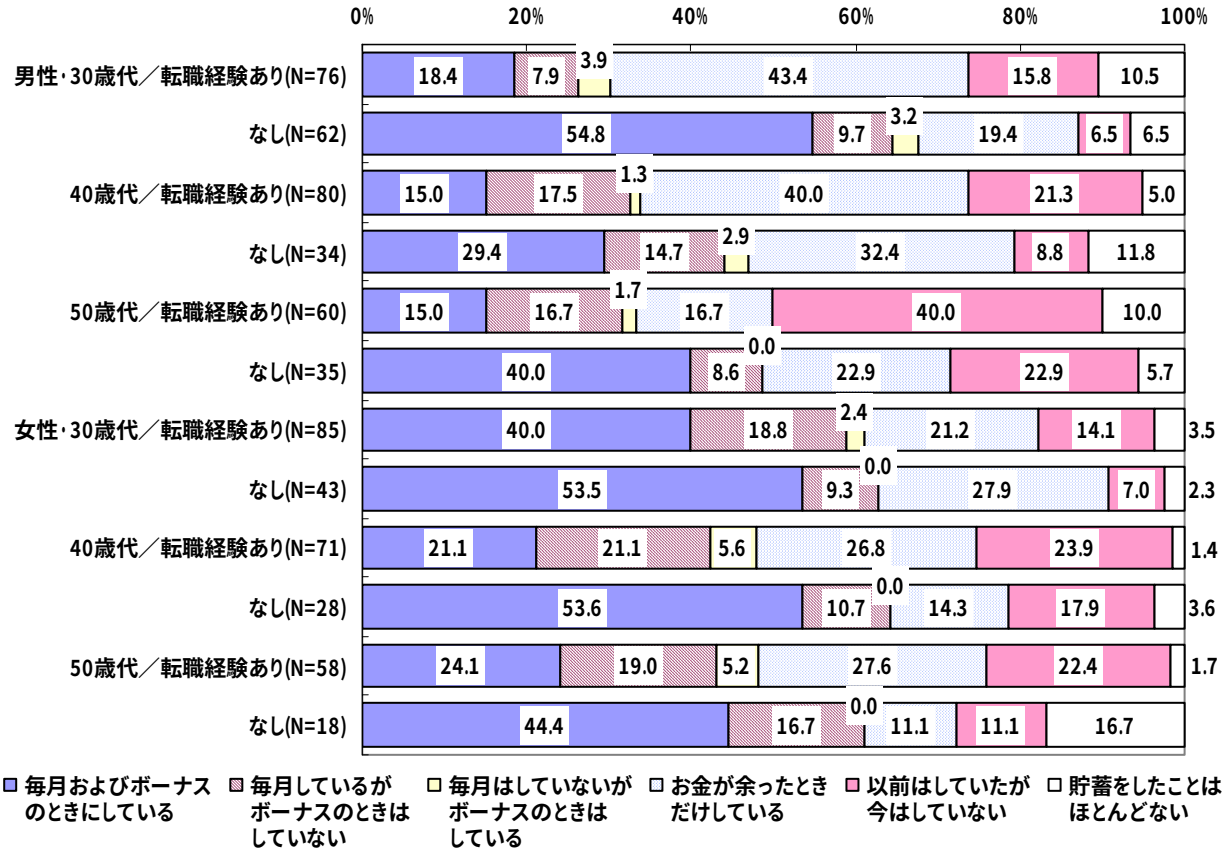
（３）転職経験者で低い貯蓄頻度（図表 4-2）

40・50 歳代で低下する貯蓄頻度について分析した結果、以下のとおり貯蓄頻度には転職経験の有無による差があることが明らかになった。

転職経験のある 30 歳代の男性では、「毎月およびボーナスのときにしている」人は 18.4%であるのに対し、転職経験のない人は 54.8%あり、36.4 ポイントもの差がある。この差は 40 歳代の男性で 14.4 ポイント、50 歳代の男性で 25.0 ポイントとなっている。

男女別に見ても、年齢層別に見ても「転職経験あり」の人のほうが、貯蓄頻度は低い。

図表 4-2　転職経験の有無別に見た貯蓄頻度



また、年齢層別に転職経験者の割合を見ると、男女とも 30 歳代より社会人経験が長い 40・50 歳代のほうが高くなっている（図表 4-3）。

図表 4-3　性別、年齢別に見た転職経験割合　（%）

男性			女性		
30 歳代	40 歳代	50 歳代	30 歳代	40 歳代	50 歳代
55.1	70.2	63.2	66.4	71.7	76.3

転職経験者は貯蓄頻度が低く、転職経験者の占率は男女ともに 30 歳代よりも 40・50 歳代で高いことが、図表 4-1 に示された 40・50 歳代の低い貯蓄頻度をもたらしているとみられる。

転職経験者は貯蓄について「以前はしていたが今はしていない」という割合が、転職経験なしの人よりも高い。未婚者ゆえ子女の教育費など支出面の増加要因も想定しにくく、転職により収入が低下した人が多いことをうかがわせる。

５．年齢による貯蓄目的の特徴

○ 心配なのは老後資金――貯蓄目的のトップ
○ 老後のための貯蓄行動、ピークは男性 50 歳代前半、女性 40 歳代後半

（対象は正規就労者）

（１）年齢による貯蓄目的の特徴

図表５は、毎月またはボーナス時に貯蓄をしている人に「貯蓄の目的は何ですか」と尋ねた回答結果。男女とも 30 歳代後半以上は「老後資金」がトップだった。

男性の場合、30 歳代後半以上は６割前後で推移し、50 歳代前半でピークの７割に達している。

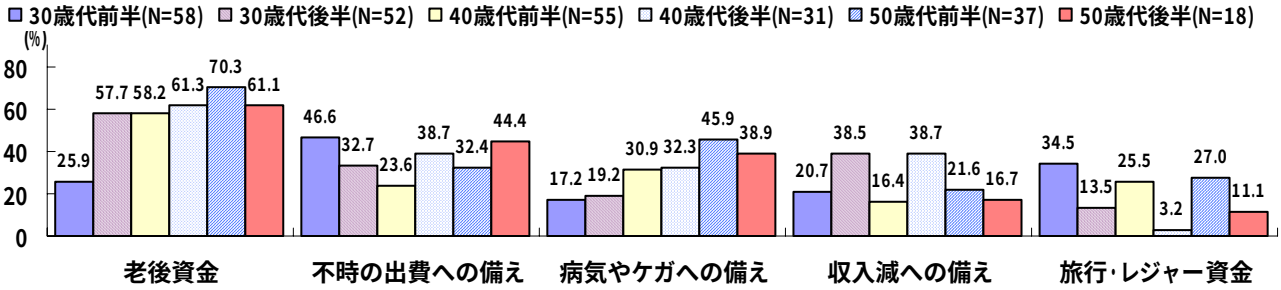
女性の場合、「老後資金」目的で貯蓄する年齢的なピークは男性より若く、40 歳代前半で７割を超え、40 歳代後半では９割近くに達した。

（２）「病気やケガへの備え」も年齢とともに増加

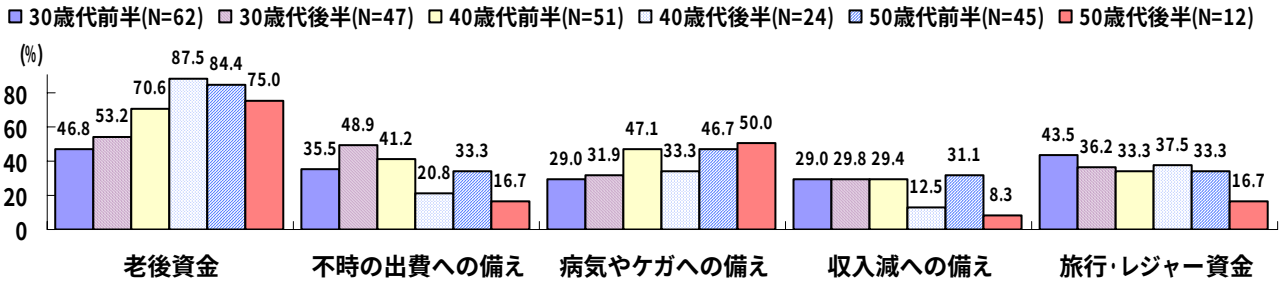
「病気やケガへの備え」と回答した人も年齢が高いほど増える傾向。50 歳代前半では、男女ともに５割弱が貯蓄目的として挙げた。健康不安を反映した結果と推察される。

図表５　貯蓄の目的（回答は３つ以内）

【正規就労男性】



【正規就労女性】



６．住宅所有の状況

○ **非正規就労者も２割近くが持ち家あり ―― その半数以上は相続**

○ **持ち家ありの正規就労の女性、６割が住宅ローンあり**

（対象は 40・50 歳代）

（１）住宅所有の状況

住宅所有率（マンションを含む）を就労形態別に見ると、正規就労者は３割強、非正規就労者は２割弱。資金面の事情から、正規就労者のほうが住宅所有率が高いのは当然としても、非正規就労者も２割弱が所有している点が目につく（図表 6-1）。

図表 6-1　住宅所有率

		自分名義の家を所有（人）	所有率（%）
男 性	正規就労　（N=209）	69	33.0
	非正規就労（N=217）	42	19.3
女 性	正規就労　（N=175）	63	36.0
	非正規就労（N=174）	29	16.7

（２）住宅所有の経緯

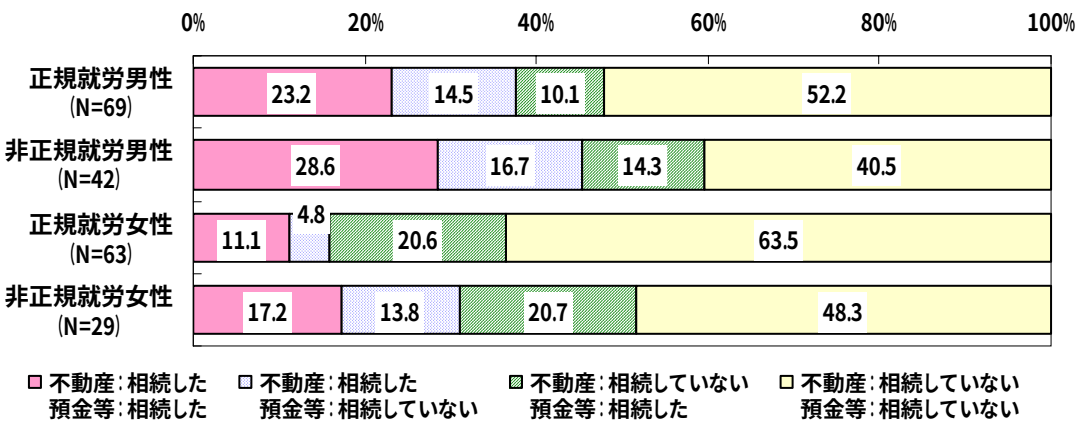
住宅を所有している人について、所有に至った経緯を見るために、親からの相続の有無を「不動産」と「預金等」に分けて検証した（図表 6-2）。

まず就労形態別に見ると、住宅所有者に占める相続経験者の割合は、男女とも非正規就労者のほうが正規就労者より 10 数ポイント高い。

また男女別に見ると、女性より男性のほうが高い。中でも「不動産」を相続している割合（図表 6-2 中、左側の２項目の合計）が高く、非正規就労の男性ではこの割合は 45.3%に達している。これに「預金等のみ相続」を加えると、住宅を所有する非正規就労男性の６割が相続をしている。

一方女性は、相続をした割合は男性より低く（特に不動産）、正規就労の女性では相続をした人は４割に満たない。

図表 6-2　住宅所有者のうち相続経験者の割合



（3）住宅ローン

住宅を所有している人で、住宅ローン残高のある人の割合は、非正規就労の男性では４分の１に過ぎないが、正規就労の女性では６割に近い（図表 6-3)。相続の有無を〝裏返し〟にしたような結果となった。

なお、一般に非正規就労の状態では住宅ローンを設定することは難しい。そのため、非正規就労者で住宅ローン残高のある人は、正規就労していたときに住宅ローンを設定し、その後非正規就労者になったケースも多いものと推察される。

図表 6-3　住宅保有者の住宅ローン残高の状況

		住宅ローン残高のある人（%）
男　性	正規就労　（N=69）	43.5
	非正規就労（N=42）	26.2
女 性	正規就労　（N=63）	58.7
	非正規就労（N=29）	48.3

７．住宅を購入したときの想定

○ **住宅購入の男性は４人に１人が結婚を想定**

○ **女性の住宅購入は、「親との同居」と「単身生活」を想定が半々**

（対象は 40・50 歳代）

相続以外で住宅を取得した人に、購入時にどのような状況を想定していたかを尋ねたところ、男女で明らかな違いが認められた。

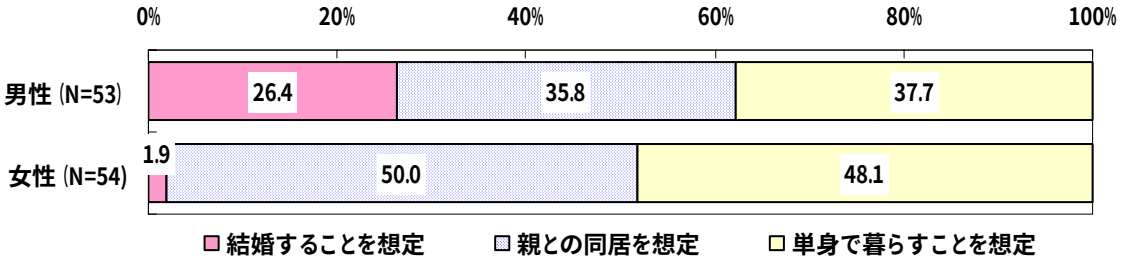
男性は、将来「結婚することを想定」した人が４分の１いるのに対し、女性ではこの割合は極めて低く、その分だけ「親との同居を想定」および「単身で暮らすことを想定」の割合が高い。

男性は女性と比較すると、高い年齢でも結婚をしたいと考える人が多いことに加え（図表２参照)、結婚したら、２人で住む家を自分が準備しておくべきであると考える人が多いのではないかと推察。

一方、女性で「結婚することを想定」する人がほとんどいないのは、結婚したときに自分の家で生活を始めるとは考えないことによるものと思われる。

女性が住宅を購入するのは、「親との同居」または「一生単身で暮らす」ことを視野に入れて、生活設計を考えるようになったときからと、言えるかもしれない。

図表 7 住宅を購入したとき想定した状況



８．老後の不安

○ 「生活資金」「健康」「要介助」――老後の３大不安
○ 女性の８割が「生活資金」が不安
○ 年齢とともに高まる「健康」「要介助」不安

（対象は正規就労者）

（１）老後の３大不安――生活資金、自分の健康、自分が要介助状態

「老後について不安に思うこと」を尋ねた。これは、今後も結婚しないという仮定で回答願ったもので、選択は３つ以内とした。

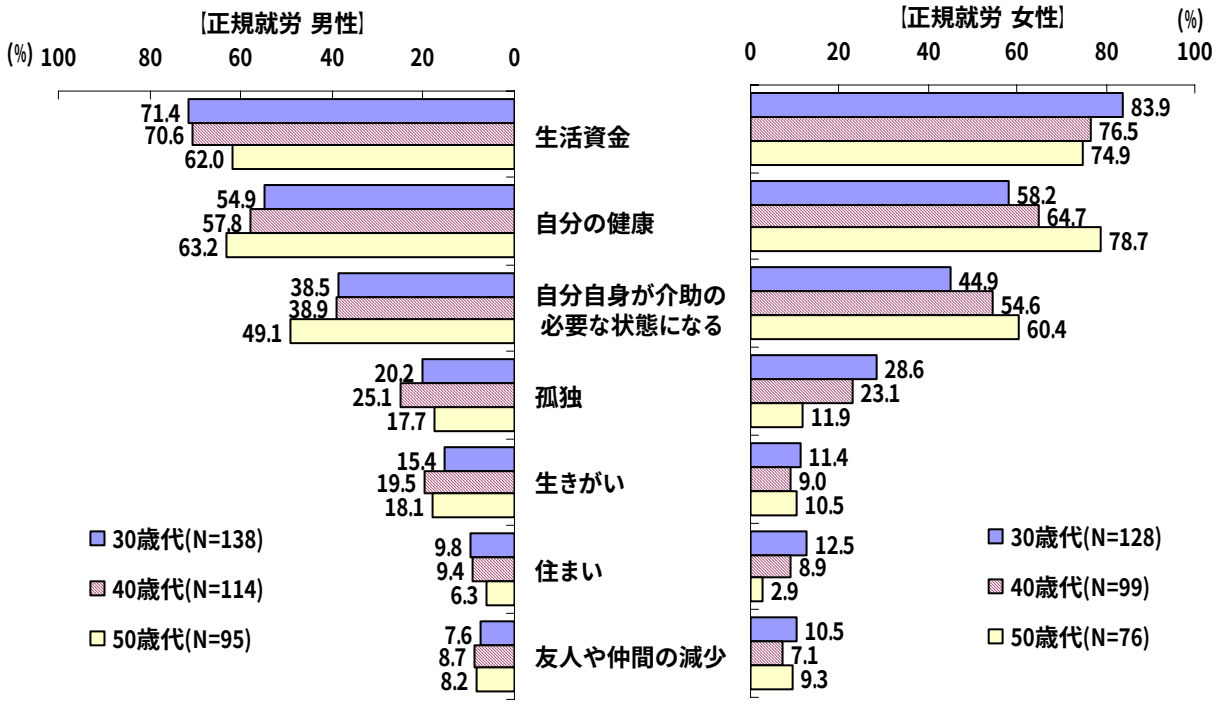
30 歳代、40 歳代の正規就労者では、男女とも「生活資金」がトップ。特に 30 歳代の女性では、６人中５人が「生活資金」と回答。

「自分の健康」と「自分自身が介助の必要な状態になる」は年齢が高まるにしたがい、割合の上昇が見られた。50 歳代では「自分の健康」が「生活資金」を上回って最多となり、介助が必要な状態になることを心配する人も、女性は６割、男性も５割にのぼった。

男性は 50 歳代で「生活資金」がやや減少している。これは、ある程度老後資金の目処がついた人が増えてくる面と、選択可能な項目が３つまでという制約があるため、年齢とともに高まってきた健康や要介助に対する不安に票を譲った面とが考えられよう。

上位３項目からはやや水があけられているが、４番目は「孤独」。30 歳代の女性の３割近く、40 歳代の男女の４人に１人が挙げている。30 歳代の女性の割合が高いのは、親しい友人が徐々に結婚して交友関係が変化していくにつれ、孤独を感じる人がいるためと想像される。

図表 8　老後不安に思うこと（回答は３つ以内）―――上位７項目



９．親が介助状態になったときの対応

○ 親と同居している人は、介助状態になっても同居
○ 50 歳代から現れる男女の違い――男性「自分には面倒みきれそうにない」、女性「私が面倒をみる」
○ 50 歳代の男性は４人に１人が「施設を利用したい」

（対象は正規就労者）

（１）親と同居している人は、介助状態になっても同居の傾向

正規就労者を分析対象としたが、男女とも、現在親と同居している人は非同居の人に比べ多くの人が、親が要介助になっても「同居」すると回答している。

親が介助状態になったとき「同居」するという回答は、現在同居中の人のほうが非同居の人よりも、40 歳代男性の場合 37.0 ポイント、40 歳代女性の場合 30.6 ポイント上回っている。

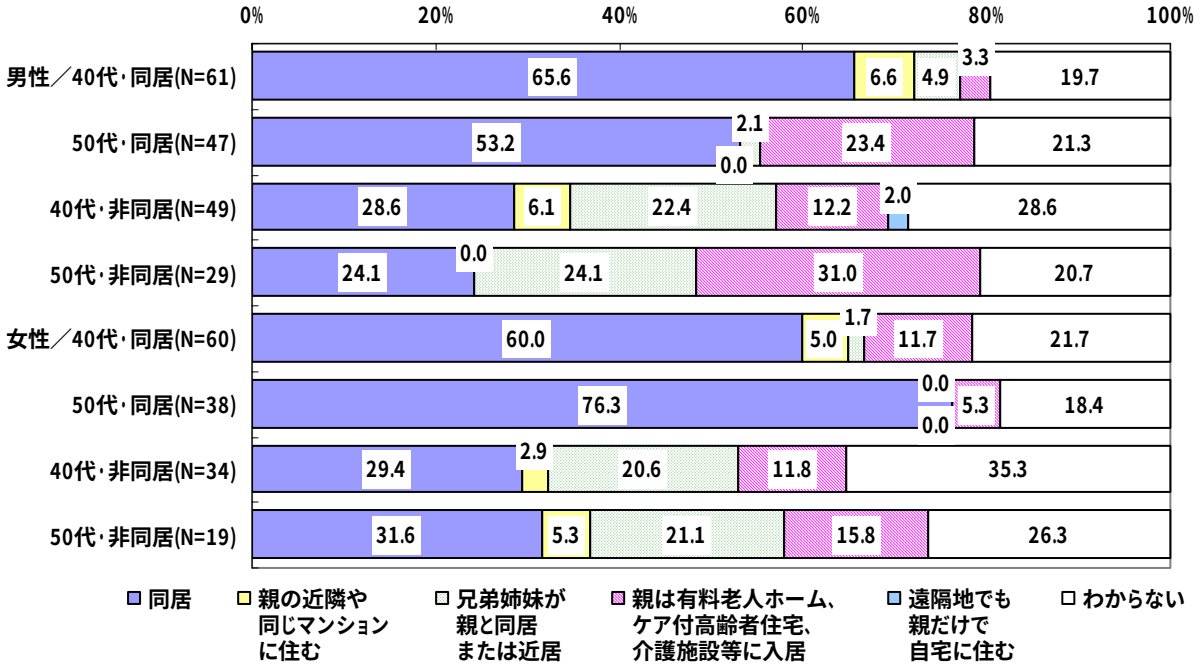
（２）50 歳代で現れだす男女の違い

40 歳代では男女差はあまり見られないが、50 歳代になると違いが目立つようになる。

親と同居している男性の場合、要介助になったとき「同居」する人は、40 歳代の 65.6%から、50 歳代では 53.2%に 10 ポイント超低下する。代わりに、「有料老人ホーム…」が 20 ポイント増えている。男性の場合、親の介助が現実味を帯びてくるにつれ、また周囲から介助に関する情報を得るにつれ、「自分では対応が難しい」、「介護施設を利用したほうが親子ともに良い」というように意識が変化することをうかがわせるような結果であった。

一方、親と同居している女性では、男性とは逆に、40 歳代よりも 50 歳代の人のほうが「同居」の選択率は高まり、「有料老人ホーム…」は低下する。女性の場合は、介助が必要になった親に対して自分が面倒を見てやらねば、あるいは見てあげたいという意識が強まるようだ。

図表 9　親が介助状態になったときの対応



10．自分自身が老後に介助が必要になったとき

○ 自分が要介助になったら？　「有料老人ホーム入居」は資金次第
○ ３人に１人は「わからない」

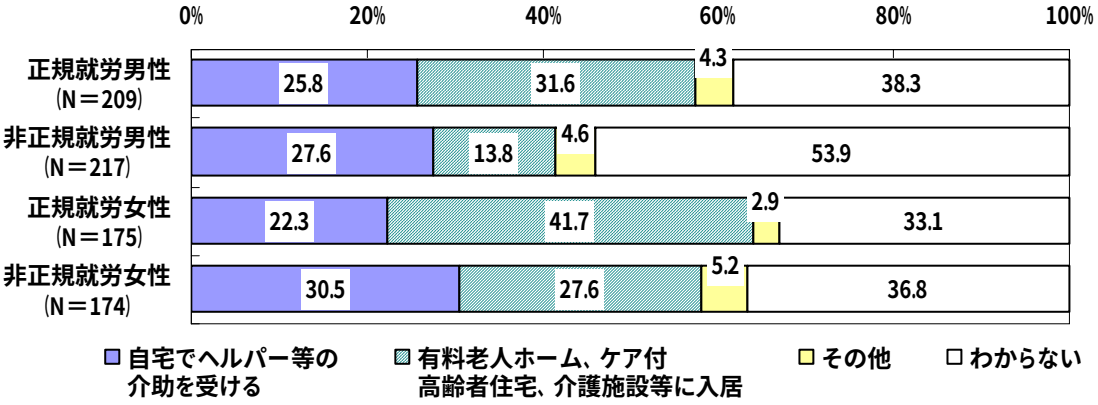
（対象は 40・50 歳代）

（1）自分自身が老後に介助が必要になったときの暮らし方

「自宅でヘルパー等の介助を受ける」と回答した割合は、非正規就労の女性でやや高い程度で、男女や就労形態でさほど大きな差は見られない（図表 10-1）。

明らかな差が見られるのは、「有料老人ホーム…」と回答した割合で、男女とも正規就労者が非正規就労者より高い。特に非正規就労の男性は、この割合が１割強と目立って低い。そして「わからない」という回答が５割を超えている。今後の就労がどうなるかすら不透明な状況において、それよりずっと先の介助が必要な状態になったときのことなど、想像もできないというのが実際のところかもしれない。

図表 10-1 自分自身が介助が必要になったとき



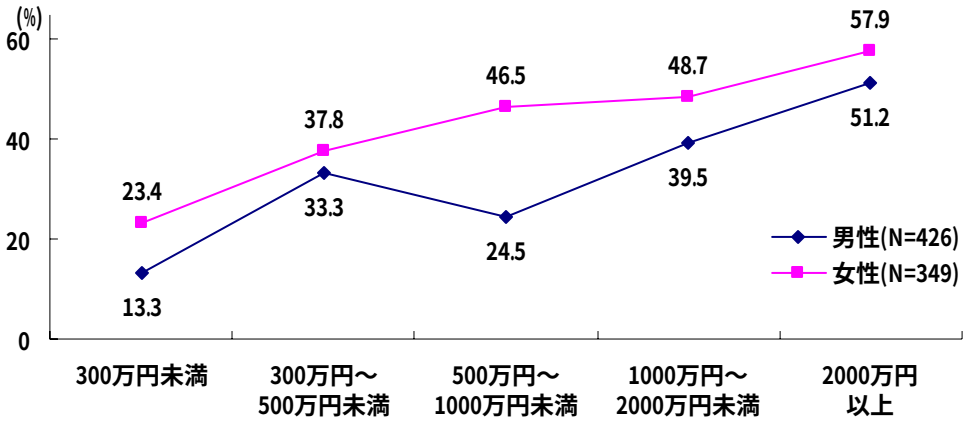
（2）資金準備との関係

有料老人ホーム等に入居するためには、相応の資金が必要である。この資金準備の視点から、貯蓄残高別に「有料老人ホーム…」と回答した割合の違いを検証した（図表 10-2）。

男女とも貯蓄残高が多い人ほど「有料老人ホーム…」と答えた割合が高い傾向。貯蓄残高が 2,000 万円を超える層では、男女とも過半が「有料老人ホーム…」と回答。

資金的な裏付けさえあれば、未婚者の老後にとって「有料老人ホーム…」が最も有力な選択肢と考えられている。

図表 10-2 「有料老人ホーム、ケア付き高齢者住宅、介護施設に入居」と回答した割合



11．現在親が住んでいる家について

○ **親と同居者の過半は、「今の親の家が将来の自分の家」**

○ **親と非同居の人は、「兄弟姉妹が住む」が多い**

（対象は 40・50 歳代の正規就労者）

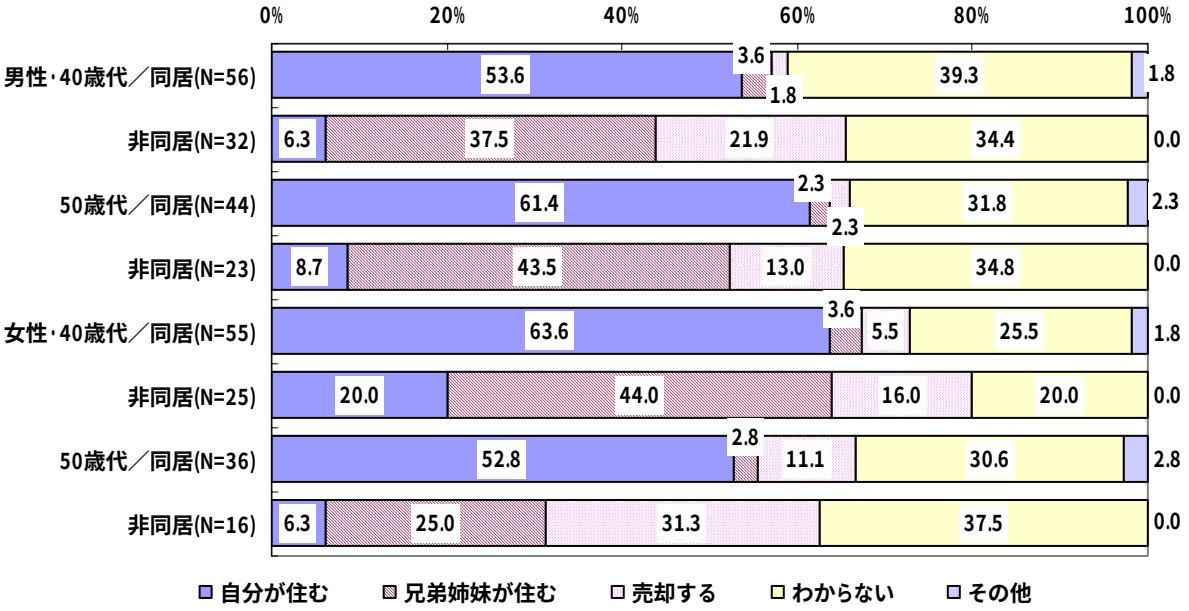
（1）親と同居している人は、親の持ち家に住み続ける傾向

親の住まいが「持ち家」の人に、親が亡くなった後は家をどうするかを尋ねたところ、現在親と同居しているか否かで結果に顕著な差が見られた。

正規就労者の回答結果を見ると、現在親と同居している場合、男女とも５～６割の人が引き続き「自分が住む」としている。しかし、親の持ち家に同居している人でも２～３割台の人が「わからない」とし、親の家をどうするかは決めかねている人が相当数いるようだ。

親と同居していない人では「兄弟姉妹が住む」という回答が多いという違いはあるものの、同居の人と同様、親の家のことはまだ先のことで「わからない」という人が３人に１人程度いる。

図表 11　親の持ち家をどうするか



12．住宅の購入予定

○ 30 歳代でも「生涯家の購入予定なし」が多数。年齢が高いとさらに増加
○ 40 歳代男性の４人に１人が「結婚したら家を買う」

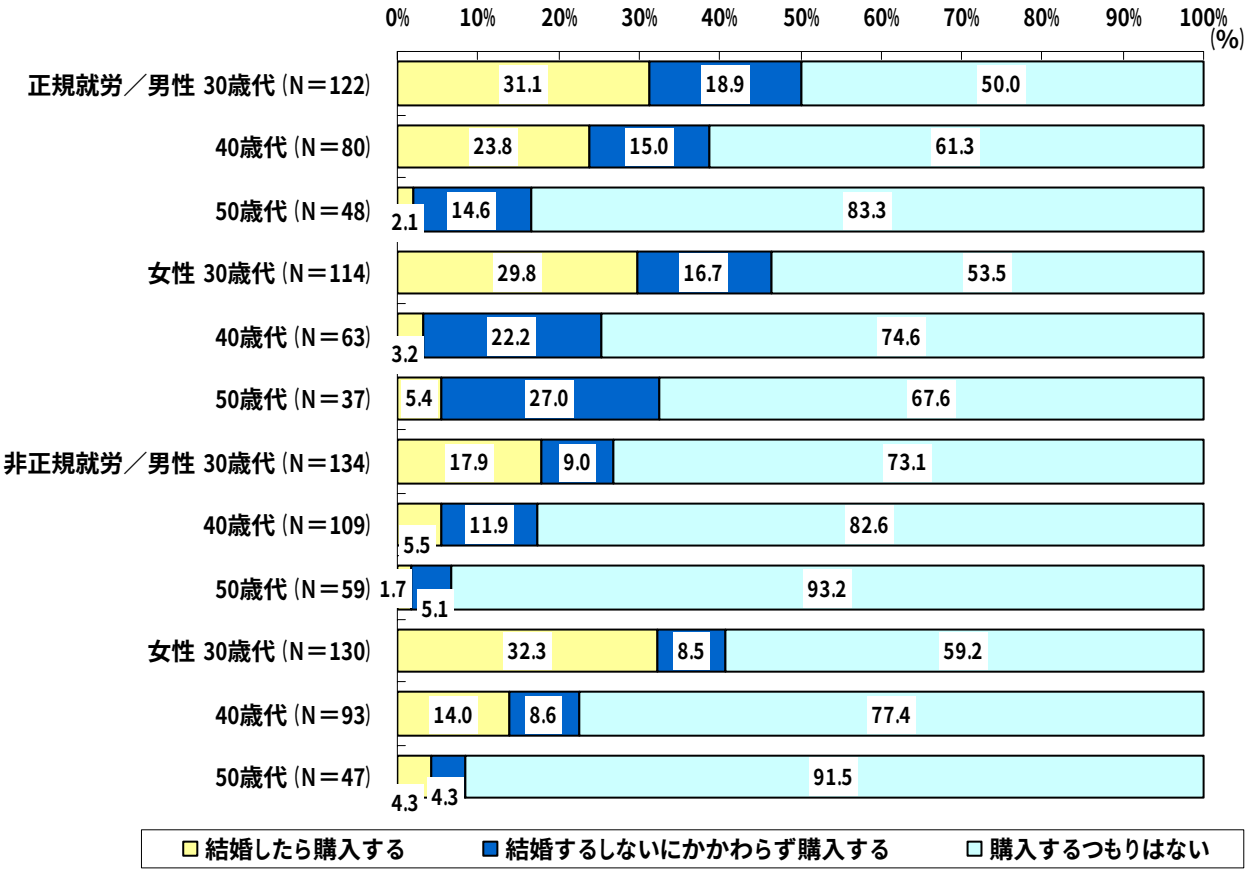
自分名義の住宅を所有していない人に、住宅の購入予定を尋ねた。男女とも各年齢層で過半が「購入するつもりはない」と回答。

年齢層が高くなるほど、結婚に対する意欲が減退するため、「結婚したら購入する」と答えた割合が低下する。ただ男性の正規就労者は、40 歳代でも 23.8%が「結婚したら購入する」を選択しており、女性の正規就労者が 3.2%に急減しているのと対照的。男性は 40 歳代になっても〝結婚前向き派〟の割合が高いことと符合（図表２参照）。

女性の正規就労者は 40・50 歳代では「結婚するしないにかかわらず購入する」と回答した割合が２割台と高い。

就労形態別に見ると、非正規就労者は「購入するつもりはない」と回答した割合が高く、50 歳代では男女とも９割を超えている。

図表 12 住宅の購入予定



13．老後一緒に暮らす人

○ **男性に顕著な老後の「１人暮らし覚悟」**

○ **相手を求める人、男性は「異性のパートナー」、女性は「兄弟姉妹」**

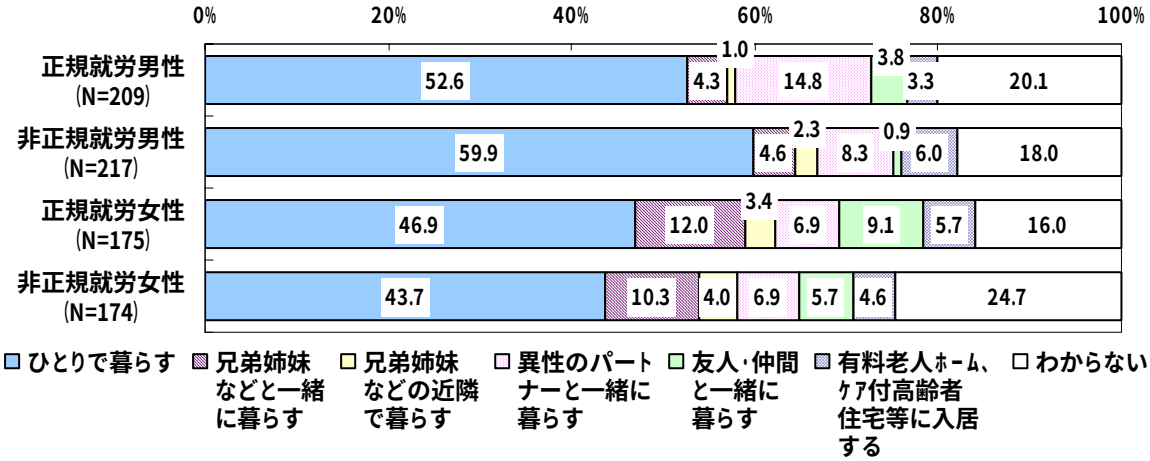
（対象は 40・50 歳代）

結婚しないことを前提に、老後、誰と暮らすかと尋ねたところ、「ひとりで暮らす」の割合が最も高いが、男性のほうが顕著。特に非正規就労者は６割が「ひとりで暮らす」と回答。この層は、人づき合いが苦手な人が多いという傾向が見られるため（図表は割愛）、それを反映した結果なのだろう。

他の回答選択肢について男女別に見ると、男性（特に正規就労者）は「異性のパートナー」が高い割合。前述のとおり、男性は中高年になっても結婚に対する願望があり、結婚しないことを前提としたこの質問に対しても、女性と暮らしたいという人が多い。

一方、女性では「兄弟姉妹などと一緒に暮らす」「友人・仲間と一緒に暮らす」の割合が高い。老後は、気遣いが必要で家事などの負担が増えかねない「異性との同居」より、気心の知れた人との暮らしを望む女性も多いようだ。

図表 13 老後一緒に暮らす人



14．老後の相談相手

○ **老後の相談相手は、男女とも１に「友だち」、２に「親族」**
○ **男性の２割が「とくにいない」**

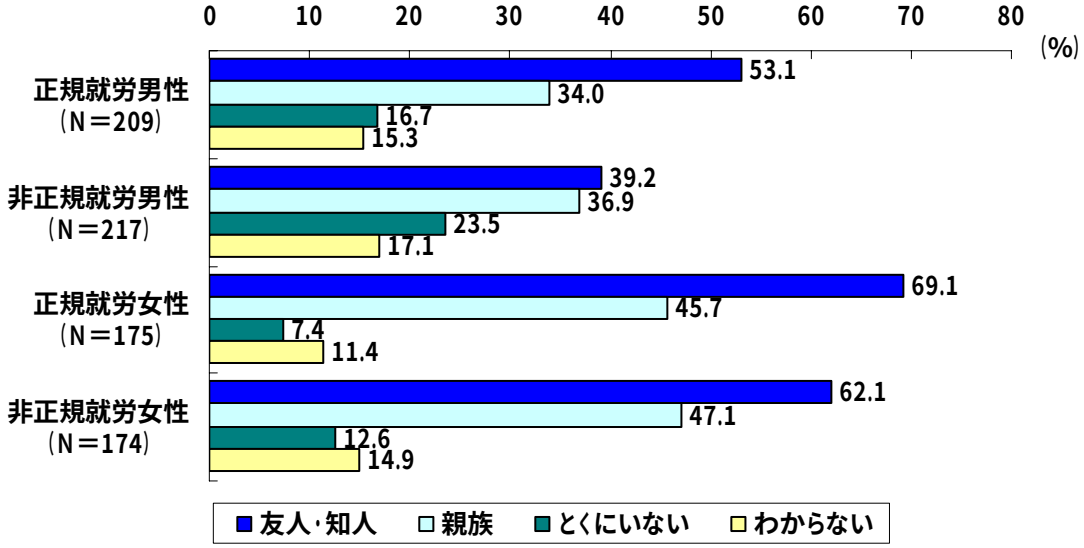
（対象は 40・50 歳代）

男女とも、老後の相談相手として「友人・知人」、「親族」を挙げた人の割合が高い点は共通しているが、この割合は男性より女性のほうが高い。女性のほうが、より具体的に老後生活を思い浮かべていると言えるかもしれない。

この裏返しで、男性は「とくにいない」「わからない」と答えた割合が女性より高い。特に非正規就労者はこの２つの回答選択肢を合わせると４割に達している。

男性非正規就労者は、「友人・知人」と答えた割合が際立って低く、人間関係が希薄なことがうかがえる。

図表 14 老後の相談相手（回答は２つ以内）――上位４項目



（注）他の回答選択肢として「近所の人」「民生委員」「市町村の相談窓口」を設けていたが、選択した人がごく少数であったため上図では割愛した。

15．老後、住みたい場所

○ **老後、住みたい場所 ―― 女性は都会志向**

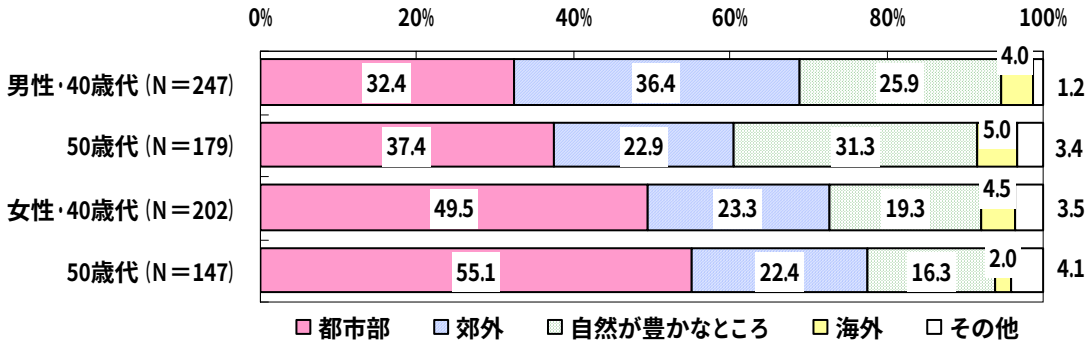
○ **年齢が高くなると〝都会派〟へ**

（対象は 40・50 歳代）

男女別に見ると、男性は「都市部」「郊外」「自然が豊かなところ」の３つに回答が分散したのに対し、女性は「都市部」が過半を占めた。女性で「都市部」の割合が高い理由は、買い物などの生活上の利便性や、文化娯楽施設、医療・介護などの環境が整備されていることを重視する傾向があるためではないか。

また、年齢層別に見ると、男女とも 40 歳代より 50 歳代のほうが「都市部」を挙げた割合が高い。健康面への不安を感じる年齢になって、医療・介護などの環境への関心が高まるのであろう。

図表 15　老後、住みたい場所



16．老後の楽しみ

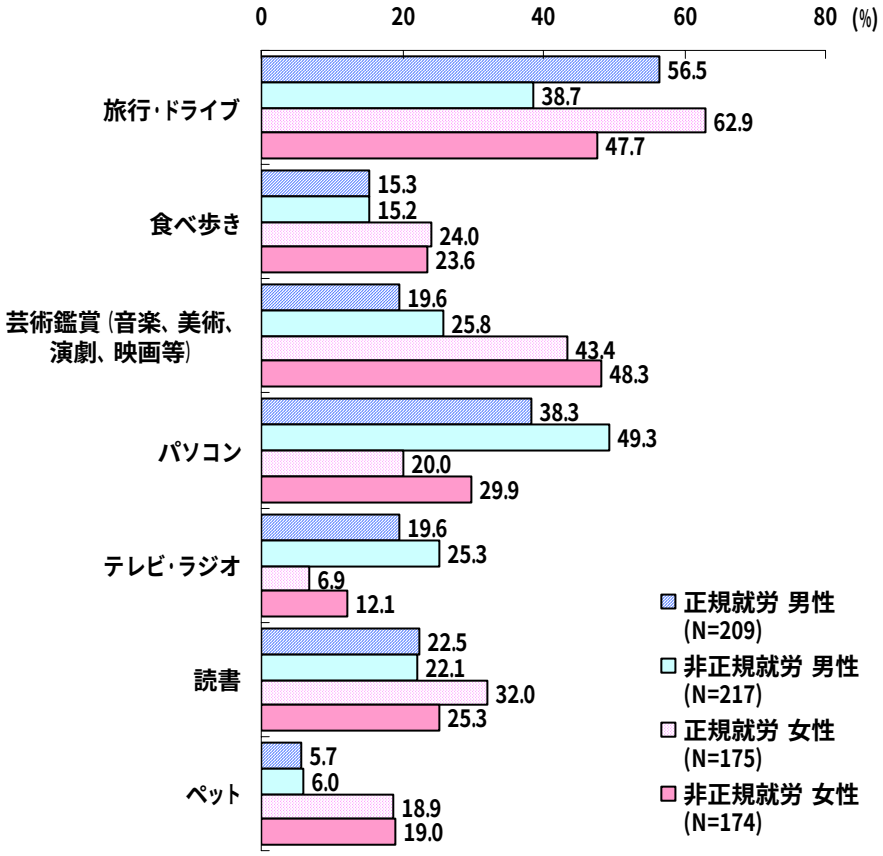
○ 楽しみのトップは老後も「旅行・ドライブ」
○ 女性に多い「芸術鑑賞」「食べ歩き」、男性は家で「パソコン」「テレビ・ラジオ」

図表 16 は「老後の楽しみ」として選択された項目のうち、多かったものを抜粋したもの。男女別に大きな違いが見られる。

女性のほうが男性より高い割合を示した項目は、「旅行・ドライブ」「食べ歩き」「芸術鑑賞」「読書」「ペット」。一方、男性のほうが高いのは、「パソコン」「テレビ・ラジオ」で、屋内での楽しみを好む傾向。

全体で最も高い割合であった「旅行・ドライブ」については、正規就労者が非正規就労者より高い。これは、費用がかかることや、車の保有状況の違いなどによるものと推察。

「パソコン」「テレビ・ラジオ」は上述のとおり男性で多く選好されているが、特に非正規就労者でこの傾向が顕著。非正規就労の男性が「パソコン」を選んだ割合は５割に近く、正規就労者より 10 ポイント以上高い。身近にあり、あまりお金もかからないことが理由の１つと考えられる。

割合はさほど高くないが、「ペット」を選んだ割合が、男女で３倍以上の開きがある点も注目される。

図表 16 老後の楽しみ（回答は３つ以内）――上位７項目